

モーテル

2007(平成19)年9月14日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★



監督=ニムロッド・アーントル/出演=ルーク・ウィルソン/ケイト・ベッキンセル/フランク・ホエーリー/イーサン・エンブリー (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント 配給/2007年アメリカ映画/85分)

……田舎の恐怖、逃げ場のない恐怖、スナッフ・フィルムの恐怖という3つの恐怖を味わうための85分は、スリラーの大好きなあなたには充足感がいっぱい……？ 迫りくる恐怖におびえながら凶悪犯たちと戦わざるをえない夫婦の迫真の演技にも拍手！ しかし、地下通路の仕掛けやドア板の頑丈さはちょっと不自然……？ まあそんな、脇道的なことはあまり考えず、素直にスリルの連続を楽しんだ方がトク……？

三部構成だが……

この映画は85分と、最近のハリウッド映画にしてはえらく短いうえ、3部構成とされているからわかりやすい。

第1部は、離婚寸前の夫婦であるデビッド(ルーク・ウィルソン)とエイミー(ケイト・ベッキンセル)が車の中で言い争ったり、エンジンの故障に悩みながら、人里離れたモーテルの4号室に入るまでの導入部で約15分間。

第2部は、この映画のメインテーマである、デビッドとエイミー夫婦の恐怖との闘いで、これが約80%を占め、時間的にも約60分。

そして、デビッド亡き後(?)、1人で脱出しようとするエイミーの奮闘ぶりを描くのが第3部で、これが約10分。

まあ、そんな3部構成だが、ラストが近づくにつれ、これで終わるのかな、それともこの先さらにアツと驚く展開が用意されてるのかなと思っていると……？

2人とも、えらいイメチェンで……？

この映画ではデビッドとエイミーは、第2部まではすべて2人一緒のシーンのみ。

第1部では、離婚寸前の夫婦らしく、ケンカは対等、しらけぶりも対等だった。しかし、第2部では、凶悪犯たちに殺されるという恐怖にさらされたうえ、モータルの支配人も共犯だとわかり、絶望的な状況に置かれる中、次第にデビッドの知恵と行動力が光りはじめ、完全にデビッド主導の態勢に……。

そんなメインの部分を、それまで『キューティ・ブロンド』(01年)や『キューティ・ブロンド／ハッピーMAX』(03年)などのロマンティックコメディで、キザ男風の役割を演じてきた人気俳優のルーク・ウィルソンが、生きるためにえらく頑張っている。他方、『アンダーワールド』(03年)や『アンダーワールド：エボリューション』(06年)で、「美しき戦士」のイメージを確立したケイト・ベッキンセールが、恐さに怯え逃げ回るばかりの役を演じてるから、2人ともえらいイメチェン……？

もっとも、それまではか弱い主婦一辺倒だったエイミーが、第3部では1人つきりになって逃げ出すに際して、かなりの力を発揮することになるのだ……？

スナッフ・フィルムってナニ……？

この映画のプレスシートには、「スリラー映画の原点に回帰した『モータル』が描く“3つの恐怖”」という詳しい解説があり、これを読めば、スリラー映画とホラー映画全般を理解できそう。ところが、そこには、「スナッフ・フィルム」という言葉が頻繁に登場する。しかし、「スナッフ・フィルム」って一体ナニ……？ あなたは知ってる……？

わからないことはすぐに調べる主義の私は、早速ネットのフリー百科事典『ウィキペディア』で調べてみると、「娯楽用途に流通させる目的で行われた実際の殺人の様子を撮影した映像作品を指す俗語。スナッフビデオ、スナッフムービー、殺人フィルム、殺人ビデオともいう。死体映像、解剖映像、事故映像、処刑映像など、撮影者が殺したわけではない映像（たとえば『ジャンク』シリーズなど）はこれに含まれない」とのこと。これを読めば、一応わかったような気になるが、よく考えてみると、「どこにそんなものが存在するの！」と反論したくなってくるのが当然。

そこで、もっと調べてみると、「実際に娯楽・流通のために人を殺した映像だとい

うスナッフ・フィルムは、現時点（2007年）では表面化したことがなく、都市伝説やモラル・パニックに類するものである」とのこと。そして、ここまで読んでやっと納得……。

モーテルの4号室に入り、せめて割増し料金分くらいのサービスは受けなければ損だと言いながら、つけたビデオはおぞましい殺人シーンの連続。そしてそれをよく見ると、その殺人シーンの部屋は自分たちが今泊まっている4号室そのものだと気付いたから大変。

『スナッフ』というタイトルの映画もあるらしい（1976年・アルゼンチン／ロベルト・マイケル・フィンドレイ監督）が、この『モーテル』は、まさにそのスナッフ・フィルムをネタにしたスリラー映画なのだ。やっとそこまでわかったうえで、プレスシートを1頁から読み始めると、何とそのイントロダクションには、スナッフ・フィルムの説明がきちんとされていた。さらにチラシにもその説明はバッチリと……。やはりどんな本でも、最初から読むべきなのかな……？

スリラーとホラーの境界は……？

私は元々ホラー映画は嫌いだから、『ソウ』シリーズ（04～06年）や『8 mm』（99年）は観ていない。しかしそれでも、『ホステル』（05年）（『シネマルーム14』393頁参照）や『テキサス・チェーンソー ビギニング』（06年）（『シネマルーム12』60頁参照）などは観ている。

ホラー映画をどのように定義するのか知らないが、そこには暴力や殺人の残忍なシーンがこれでもか、これでもかと続いていくため、気分が悪くなったり、思わず目を覆ってしまったりすることが多い。それに対して、スリラー映画はスリル満点の映画のこと（？）だから、ハラハラ・ドキドキの連続で、その延長として恐怖を感じることもあっても、それはあくまでスリルの範囲内……？

スリラーの代表作がヒッチcock作品だとすれば、ホラー的スリラーは、ある意味邪道かもしれない。するとこの『モーテル』は……？ この映画がスナッフ・フィルムを軸としたスリラー映画ということは前述したが、残忍シーンと恐怖の叫び声が登場するのはビデオからだけで、登場人物は直接ホラー的行動をとらないから、やはりこの映画は正統派スリラーを継承……？

支配人のキャラと知能程度は……？

こんな田舎のモーテルの経営がどうやって成り立っているのか不思議だが、そんな片田舎のモーテルを舞台としたスリラー映画を鑑賞するについては、あまりいろいろと脇道的なことを考えてはダメ……？ なぜなら、ニムロッド・アートル監督は、モーテルの部屋に事実上監禁され、襲ってくる凶悪犯たちの恐怖におののく主人公たちの気持ちに、いかにして観客を同化させるかに苦勞しているわけだから、観客もそういう気持でスクリーンを観なければ……。

しかし私が観る限り、このモーテルの支配人メイソン（フランク・ホエーリー）は見るからに人の良さそうな普通の人……？ そんな見かけの人に限って一皮めくってみるとんでもない異常者という例は多いが、展開がどんどんシビアになっていく中でも、このメイソンの冷酷非道さや残虐性があまり見えてこないのが玉にキズ……？

また、部屋の中に事実上閉じ込められている1組の夫婦を男数人で襲って残虐に殺し、その様子をビデオに撮るだけならそんなに苦勞しなくても可能だと思うのだが、それがなかなか順調に進まないのは一体どうして……？ それはデビッドの頑張りが強いおかげともいえるが、反面メイソンの知能レベルが低いせいかも……？

ドア板ってそんなに丈夫……？

この映画が、①田舎の恐怖、②逃げ場のない恐怖、③スナッフ・フィルムの恐怖という「3つの恐怖」と集約できることは、プレスシートの解説を読めばよくわかる。しかし実際は、逃げ場のない恐怖とは言いながら、秘密の地下通路が設置されている。したがってこれが攻撃の拠点ともなれば、逃走の道にもなるから一長一短……？

また凶悪犯は数名いるのだから、さっさと凶器を持って4号室の中に押し入ってけばたちまち部屋の中は修羅場と化し、スナッフ・フィルムのための舞台はいくらでも自由に設定できそうなもの。ところがこの映画では、ドアの板1枚が強固な防波堤となっているから不思議。すなわち本気で部屋の中へ押し入ろうとすれば、大きなハンマーを持ってきてドアの板を破ればそれでおしまいと思うのだが……。ジョディ・フォスターが主演した『パニック・ルーム』（02年）は、絶対に入れないという部屋の強固さが売りだった（『シネマルーム2』162頁参照）が、安モノのモーテルの部屋のドアってそんなに丈夫なの……？

素直にスリルの連続を楽しまなくっちゃ……

部屋に入った途端、入口のドアや隣の部屋でドンドンとけたたましい物音が。こりゃ一体誰が……？ エイミーが車に残したはずの血のついたりんごの残りが、なぜか洗面台に。こりゃ一体誰が……？ やっと公衆電話までたどり着き、緊急電話につながったと思ったら、何とその相手はあの支配人……？ 大きな車が着いたので助けを求めようと思ったら、何とそのドライバーも支配人の仲間……？ さらに命からがらやっと緊急連絡がつきパトカーがやってきたと思ったら、その警察官も凶悪犯たちの手にかかり、デビッドとエイミーの目の前であえない最期を……。こりゃまずい……。いよいよ次は自分たちの番……？

誰もがそう思い、必死に逃げ道や対抗策そして戦闘方法を考えるはず。しかし現実には武器なし、地理勘なし、そして応援部隊なしという無い無い状態だから、デビッドとエイミーは複数の凶悪犯に立ち向かったり、このモーターから逃げることは不可能……？

この映画のメインとなる第2部の約60分間は、そんなスリルがいっぱい。したがって、私のようにあまりいろいろと協道的なことを考えず、素直にスリルの連続を楽しまなくっちゃ……。

2007(平成19)年9月15日記